
エルを捕まえろ！！(The Hunt for phantom thief Raphael！！)

腹黒伯爵

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

怪盗ラファエルを捕まえろ!! (The Hunt for phantom thief Raphael!!)

【Nコード】

N98500

【作者名】

腹黒伯爵

【あらすじ】

怪盗 それは、フィクションの世界でしか存在しないものだった。
・
義賊 それは、架空の存在。

2002年 首都・東京

奴は、現れた!

「警視！第1班より連絡。本館正面玄関に奴が出現！」

「同第2班より連絡。右側に出現した奴はおとりと判明！」

攪乱される警察

「怪盗、義賊だと！？そんな存在が明確な法体系下の近代社会で存在できるのか？それは疑問だよ。」

「怪盗だろうが、義賊だろうが如何に善行をつもうが、明確に法に触れた段階で犯罪者だよ。法を変えない限りね。そして、それは法の下の平等という近代法学を犯すことになる。」

「待て！怪盗！！」

学者のような探偵？

「次の目標はここですわ。」

「如何に善行を表面上行っても、いずれは化けの皮ははがれるものね。」

怪盗とその仲間たち。

「では諸君。つぎはここが目標ということですのでよろしいですか？」

「結構でしょうな。」

暗躍する秘密結社。

「怪盗だと？」

「いくら怪盗といえども、このからくりには判るまい。奴は義賊であつても正義の味方ではないのだからな。」

たくらまれる陰謀。

複雑に思惑が入り乱れる、現代のバビロン東京、首都圏を舞台に今、怪盗と警察、そしてそれ以上の「戦争」が幕を開ける。

「災いなるかなバビロン、そのもろもろの神の像は碎けて地に伏したり」

（旧約聖書イザヤ書第21章・バビロンの滅亡「機動警察パトレイバー劇場版1」より）

怪盗ラファエルを捕まえろ！！

始まります

（2010/11/25・全面改定）

1 - 0 そして役者はそろった

2002年5月12日 東京都千代田区霞が関 警視庁本庁舎
10:00

警視庁本庁舎の一角は非常に重苦しい雰囲気に包まれていた。ここ最近、「怪盗」等というフィクションの中でしか存在しないと思われていたものが、世間を騒がせていたためである。

「手掛かり、無し、か・・・」

本来、窃盗事件は警視庁刑事部捜査第三課が主管する案件である。ところが、本件はその連続性・知性的な手口より、知能犯担当の二課に役が回ってきた。

「どうせなら、一課のほうがよかったのに・・・」

思わず愚痴をこぼす幹部が続出しているこの案件、「連続窃盗事件」後の「怪盗ラファエル」と呼ばれることになる怪盗と警察の「戦争」の幕開けとなることを、この時点では誰も知るよしはなかった。会議はいつになるかわからない愚痴の言い合いに収集し始めた。その時、上座に座る男が決断を下した。

「諸君の話を聞いていると、専属のチームを作成し、この事案の対処を行うようにしたほうがいいと思われる。数日内にチーム編成を行うので、そのように。」

5月15日 警視庁内会議室 10:00

「もうそろそろかね。」

警視庁刑事部長黒崎孝也が部屋の時計を見ながら言った。窓の外では皇居の新緑が見える。

「もうそろそろかと思えます。」

刑事部捜査二課課長中森行典がそれに答える。

「最善のチームなのだろうね？この部隊は。」

「はい。本庁・所轄の垣根をこの際破壊し、ベター・チームを創設

しました。」

「なぜベストではないのかね？本案件、メディアへの露出は控えているが場合によっては警察の沽券にかかわる案件なのだよ？」

「部長、本案件は長期化します。最悪、警察総力をつぎ込む必要があるでしょう。それまで、このチームで防ぎ切ります。」

黒崎の疑問に、中森が答えた。

「うむ・・・君の判断を尊重しよう。ベストを尽くし、結果を残してくれ。」

その時、会議室のドアがノックされた。

「失礼します。千葉です。」 捜

査二課のコントローラー、捜査案件のの切り盛りを担当する管理官の千葉百雨の声がした。

「入りたまえ。」

黒崎が返答をするとドアが開き、数名入ってきた。

「掛けたまえ。」

中森の声に反応し、彼らは椅子に座った。

「君たちを呼んだのはほかでもない。」

黒崎が言葉を区切った。

「昨今、怪盗等という正体不明のものが首都圏を中心に出ておる。

よって、我々・神奈川県警・千葉県警・埼玉県警は極秘に調整を行い、無論各公安委員会にも調整済みだが、警視庁を主体とし、本庁刑事部捜査二課内に対策班を設置し、この事態の対処に当たることとなった。」

会議室にいた全員に緊張感が走った。この案件が捜査二課の担当になって以来、事態の進展をこの目で見てきた連中ばかりである。

「指揮命令系統上、捜査二課とは別個になる。また、我々以外の各県警の上層部しかこの事は知らない。管理責任者に千葉君を充てることとする。」

「はい。承ります。」

「次席責任者として、高宮君。君にやってもらいたい。」

「承ります。」

「内海君。君が現場の責任者だ。随時、各県警より2名の出向者を
入れて増強を図るが、とりあえずは内海班で処置を頼む。」
「承知しました。」

同時刻 某所

「刑事部はうまくえさに食いついたか。」

スーツを着た男が同じ井出達の男に言った。

「ええ、うまく食いつきましたよ。警視庁刑事部は警察庁刑事局と
調整して広域捜査班を立ち上げるようです。」

「そうですか。なかなか進まないと思っていましたが、急に動き出
しましたね。」

「黒崎さんは次の次の次ぐらいを狙っていますからね。刑事畑出身
で総監・長官はあまりいませんから、これを機会に一気に狙う気な
のかもしれないね。実際、エースをつぎ込んでいませんから。」

「どういうことですか？」

別のスーツ姿の男が興味を示した。

「一課案件ということで処理する話もあったのです。実際のところ
は・・・ただ、黒崎さんが潰しましてね。ここで、大塚さんと組ん
で広域捜査班構想、ひいては今回の件で日本版FBI構想をぶち上
げて一気にポイントを稼ぐ作戦に出たのですよ。マスコミ受けしま
すしね。この事案。」

「マスコミ受けするようにするのは、我々4騎士だよ。」

「そうですね。」

その場にいた全員が苦笑した。

「いずれにしても、ラファエルも刑事部も頑張ってもらわねばなら
ない。そのために、我々はここににいるのだし、これから行動をす
る。そのことを、各自忘れないで頂きたい。」

「その辺は承知している。」

「では、今回の会合は解散にしたい。次の目標は資料のとおりとし

「たいが異存はないだろうか？」

「異議はない。」

同じくスーツ姿の男の声に、皆が賛同した。

「では、次の行動は原案通りということとする。事務手続に関しては、いつも通りとしたいが出来るだろうか？」

スーツ姿の男たち全員の首を縦に振るジェスチャーに司会役の男は納得した。

資料にはこう書かれていた。 商事・代表取締役社長 小田修誠
と・・・

1-1 そして役者は揃った。

2002年5月20日 東京都中野区 聖ポール学院高等部校舎
10:30

やっと2時間目が終了した。理数系の授業は疲れる。私こと浅海雄彦、学業はほどほど、文系科目は強いが理数系はかなりメタメタ、で、成績は中の上。運動神経はママいいほかと自分では思っている、ごくごく普通の高校2年生。進路はまあ・・・私立の法学部に行こうかな？と考えている。ある親交のある大学生に影響を受けて・・・政治学も面白いかなと考えている。僕は、歴史が好きだ。歴史が好きだ。歴史が大好きだ。人間の営みというものを研究することは面白いと思う。

3時間目は日本史の時間だ。その親交のある人間曰く、日本史では人名は複雑だけど受験には使いやすい。暗記科目じゃないよ。流れで覚えるのだと言っていた。うむ、彼の言う通りだと思う。

「浅海、このニュース知っているか？」

友人が今朝の朝日新聞を片手に声をかけてきた。

「何のニュース？」

「昨夜、また出たらしい。怪盗ラファエルが！」

やっぱり。ここ数カ月、東京都内のみならず首都圏全域に出没している怪盗の話題で、ローカルニュースは持ちきりだ。フジのスパークニュースではアンドウさんがいつもの表情を浮かべながら、そのニュースを読んでいるのをよく見る。

「で、その怪盗がどうかしたって？」

僕は友人に尋ねた

「いや、どんな奴なのかなって思ってたさ。世の為人の為に盗みを働

くなんて、江戸時代のネズミ小僧じゃあるまいし、現代のしかも21世紀の東京に出現するなんてさ。いったいどのどなたなのかなって思ってたさ。」

「で、俺に話を振ったと？」

なんてやつだ。と思いながら苦笑した。

「少なくとも言えるのは日本人だな。住所も戸籍も電話番号も持っている。で、おそらく、これは推測だけど年を取ってはいないわな。こんなことは暇人にしかできない。もっと言うと、なんというか、歪んでいるのだよ。善悪の判断が未だに弱いというか、揺らいでいるのだよね。この世に絶対的な善悪などないのにさ。」

友人の顔を見る。ここまでの創造を聞いて、キョトンとしている。

「どうもニュースを見ていると、盗みに入った後の警察の調査でいろいろと見つかるから印象操作で悪人に見えているのじゃないかな？そもそもの保有者も調べて白じやないと、問題があるような気がするんだよなあ・・・」

友人の顔を再び見る。

「何か？」

「いやあ、だんだんお前が探偵に見えてきたよ。」

そう言つて肩を叩く友人の相手をしながら、考えを切り替えて次の日本史の準備をすることとした。

神奈川県横浜市西区 横浜駅前 同時刻

「うまく捜査本部内には潜入できたようだな。」

横浜駅構内のスーパ屋に二人のスーツを着た男が向かい合つて座っていた。

「ええ、一応県警刑事部からの出向ということで潜入できました。これから、特捜内の情報を流せますよ。」

「全く、組織内でスパイのまねごとをせねばならないとは世も末だ

な・・・」

「仕方ありません。この件は我々の威信もかかっておりますが、世の為人の為なのですから。」

若いほうの男がスープを飲みながら言った。

「そうではないよ。世の為人の為ではない。国家のためなのだよ。」

「国家ですか・・・天下国家をしたり顔で語る連中にろくなやつはいなかったですよ。」

「大学で日本近代史、特に2・26と警察の関係で学位を取った君らしい言い方だな。まあ、分かる。だが問題は、今この段階での危機なのだよ。」

「やるだけはやってみます。期待はしないでくださいよ。」

そう言って若いほうの男は笑った。

「お前さん、食うねえ・・・俺はほとんど食っていないのに。」

そう言ってもう一方の男は若いほうの男の皿を覗き込んだ。からだった・・・

「まあ、この職業は体力勝負ですからね。これからもっと体力を使うことになるのでしょうか？」

そう言って彼は笑いかけた。

「まあな。」

聖ポール学院高等部校舎 12:30

学食で昼食を取っていると、横に一人の男が座った。僕と同じように眼鏡をかけ、背の高いこいつのことはよく知っている。中学時代からの腐れ縁だ。

「見事な推理だったよ。浅海。」

「ありがと。御手洗。」

御手洗史彦、両親ともバンコクに駐在しているとかで、今は都内の親戚の家に厄介になっっているらしい。まあ、そんなところもうちと同じ境遇だ。うちの場合は父親が外交官でいまはベトナムに赴任し

ている。ちなみに単身赴任だ。なんでも御手洗のところは支店長なので、夫人にぜひ同伴してほしいとのことらしい。全く、海外赴任は大変だと思う。

今年の夏はぜひベトナムに行ってみたい。ホーチミンのミイラやらベトナム戦争の兵器が展示してあるなんて、近代史マニアから見たら涎ものだ。

「で、小説や漫画だとお前さんのようなポジションの人間だと、「名探偵」やら「少年探偵」と呼ばれるようになるのだが・・・」
そう、こいつは結構なオタクで、その点も僕との相性が良い。よく連れだつて、中野や吉祥寺で遊んでいる。

「おいおい。僕は銭形のとつつぁんでもなければどこぞの少年探偵でもないのだよ。ごくごく普通の少年だよ。それに、得体の知れない薬品を飲まされて、「体は子供、頭脳は大人！」なんて言いたくないよ。」

そうなのだよ。あれはあくまでもフィクション。現実には起こらない。なぜなら・・・

「法の問題、だね。そもそも司法警察員でもないのに逮捕権限があるなんておかしいのだよ。どこぞの少年探偵たちは。」

そう言つて、史彦はタヌキうどんをすすった。ちなみに僕はラーメンを食べている。

「そうだ。もうそろそろワールドカップだな。」

そうだった。ワールドカップがもうそろそろ開幕する。日韓共催だっけ・・・

「チケットがあればね・・・見に行くのだけど。」

「どこのBARでもパブリックビューのチケットが出ているらしいじゃないか？おじさんとは見に行かないの？」

「おじさんねえ・・・」

彼の伯父は財務省で官僚をしている。その伯父さんというのがこれ

またすごいサッカーファンらしい。

「その時、ワシントン出張らしい。ものすごく悔しがっていた。」
そう言つて史彦は大笑いした。

「なに！ワシントンだと！？FRBの連中はそんなに俺のことが嫌いか？！だったらアメリカ国債でも売つてやる！と冗談で言つたらしい。財務省のその課の人、全員苦笑していたらしいけど・・・」

「水野の伯父さんの世代だとメキシコオリンピックを知っているわけだよね・・・そりや燃えるわな。ワシントンには行くのдарろ？」

「そりや勿論。ワシントンでも絶対見てやると豪語していたらしい。」

「

学食内の別のテーブルでは、如何にもかわいいという女子生徒3人が向かいあつて昼食を食べていた。

「麻耶、どうだった？昨日の私の活躍。」

隣に座つた遥がそんなことを言っている。全く、人の気も知れないで・・・

私の名前は、浅海沙耶。聖ポール学園中等部に通う2年生です。と、誰に説明しているのдарろ？さつきも言つたけど、隣に座っているのが同じクラスの椎名遥。で、その向かいに座つて渋い表情を浮かべているのが同じクラスの大道寺麻耶。

「遥ちゃん。もつと小声で。」

麻耶がちよつと厳しめに遥に言う。

「ごめん。で、どうだった？昨日の私の活躍は？」

「どうつて言われましても・・・」

困つた表情を浮かべて麻耶が私に助けを求める。おいおい遥さんや、いくらなんでも空気を読んでよと思う。

「今回、意外とあっさりしていなかった？」

そう助け船を出す私。

「そうなのよね・・・」

うなずく遙。おいおい、女性の私から見てもその表情は結構かわいいぞ。お兄ちゃんには「お前はかわいげがないよな。」とよく言われるのだから、遙の表情と比べて若干へこむ私。

「警察も陣容を整えているのではないのでしょうか？」

麻耶がそう言う。

「今日の日経新聞に、警察幹部のコメントが載っていました。これからは警察の最精鋭部隊を導入して、オール警察軍で警備すると・・・」

・
」

お兄ちゃんの影響からか、歴史系に興味のある私。おいおい、オール警察軍って、いつの時代ですか？

「怪盗ラファエルもいよいよ年貢の納め時ですか」

ちらつと横目で遙を見ながら言う私。その表情はきつと意地悪く見えるだろう。

「そ、そんなことないわよ！」ああ・・・やっぱりだ。声を出しちやった。

「ちよつと遙ちゃん。」慌てて

押さえる麻耶。意地の悪い小悪魔的な私。すぐに表情が出る遙。そしてそれを抑える麻耶。どこかで見たことある関係だぞ・・・

「ごめん。ひどいよ沙耶。怪盗ラファエルは無敵なのだよ。」

今度は小声で言う遙。

「はいはい。」

そう言っただけの私。そんな事を云いながら、私はあの日のことを思い出していた。

2002年1月6日 神奈川県鎌倉市 円覚寺 07:00

その日、私たちは冬休み最後の週末を鎌倉市内で過ごしていた。遙

がどうしても鎌倉に行きたいと11月ぐらいから言っていたのだ。中学1年生だけで泊まることに当初は親もみな反対したが、結局うちのお兄ちゃんと、お兄ちゃんと親交のある久瀬絵里さんが保護者代わりになって、ホテルを抑えてくれた。土曜日に鎌倉に入って大仏や鶴岡八幡宮を見学した私たちは、翌朝、海沿いにあるスターバックスでコーヒーを飲みたいという絵里さんの希望にお兄ちゃんがついて行って、私たち3人は円覚寺から富士山が見えるという絵里さんの話を聞いていたので、円覚寺に来ていた。

「うわぁ・・・きれい。」

冬の関東は空気が澄んでいるとこのことで富士山もはつきり見えた。やはり、冬の円覚寺はきれいだと思う。山頂の茶屋で御抹茶を頂きながら見る富士山というものはそれはそれで美しく、知り合いの外国人にもぜひ見せたいと思った。その時、突然眩しい光が私たちを包んだ。

「ここは・・・？」

私たち三人、外の世界とは切り離されたような感覚がした。そう、たとえば言うなら、光の世界に包まれたような感じ・・・

「あなたたちに、私の声が聞こえますか？」

不意に誰かに話しかけられた気がした。

「ねえ、私に話しかけた？」

遙が聞いてきた。

「いえ、話しかけていない・・・じゃあ誰？」

「あなたたちの心に話しかけています。」

胡散臭いことこの上ない。お兄ちゃんがかかなりアレな性格なので、知らずに移ってしまったのかもしれない。

「あなたは誰のですか？」

麻耶が尋ねた。

「私の名はラファエル。」

正直その時、心の中とはいえ絶句した。天使が降りてきたのだ。「どうしようもない僕に天使が降りてきた」じゃないけど、天使が自分の心に話しかけている。落ち着け、落ち着くのだ。

「大天使ラファエル。なぜあなたが私たちに話しかけてくるのです？」

「いま、この世界は邪悪に満ち満ちています。」

まあ、確かに・・・去年はニューヨークであの事件があったし、合衆国はそれによってアフガニスタンで戦争を始めた。確かに、世界は邪悪に満ちている。ただ・・・

「大天使ラファエル。あなたの言う邪悪とはなんですか？」

麻耶が質問した。おそらく私と同じ考えなのだろう。それは質問しないといけない。

「人はみな、心に神を宿しています。その神は、人それぞれ違うものです。その違いを理由にして人はいま、憎み、争っています。世界は邪悪に満ち満ちています。」

良かった。これでキリスト教だのイスラム教だの宗教がらみの話が出てきたらうそくさいことこの上ない。

「大天使ラファエル、なぜ私たちに話し掛けてきたのですか？そこまで世界の現状に御嘆きなら、その御姿を全世界に見せ、直接お声をかければよいではありませんか？」

私は思わず聞いた。

「今の人々は、私が姿を見せたところで信じようとは思いません。あなたが自然に対する素朴な感情に私は掛けようと思ったのです。」

確かに・・・超常現象で食っているテレビの業界人のなんと多いことか。それに対する評論家もそれで食っているし・・・科学全盛の時代と人は言うけど、最も怖いのはそんな人のあくなき欲望じゃないのだろうか？とお兄ちゃんが良く言っていたのを思い出した。

「大天使ラファエル、私は何を摩れば良いのでしょうか？」

遥が乗ってきた。そこ、乗るのじゃない！

「私は、もう黙ることは許されなと思います。ですが、今私の言葉に耳を傾ける人はいないでしょう。みなさんをお願いします。今の世界から少しでも欲望を除くようにしてください。そして、神の言葉に耳を傾けるようにしてください。あなた方に力を貸します。椎名遥さん。」

いきなり遥は自分のフルネームを呼ばれて驚いたようだ。

「はい?!」

「あなたに力を貸します。大道寺麻耶さん、浅海沙耶さん。椎名遥さんに協力してください。」

そう言って、元の風景に戻った。

「なんだったの一体・・・」

私は思わず呟いて、時計を見た。時間は・・・経っていなかった。

「どうということなの?」

麻耶が尋ねる。

「つまり、私たちは超常現象に遭遇したわけだと思う。寺の中で天使にあうなんて・・・」

円覚寺、臨済宗の仏教寺院なのだよね・・・最も、最近は宗教間の対話も進んでいると聞くけど・・・

「これ、何だろう?」

遥の手の中に、ブローチがあった。

「これってもしかして、魔女っ子か変身ヒロインになって世界を救えってこと?」

親交のある大学生のお姉さんが言っていた。この世界に正義も悪も存在しない。人の数だけ正義と悪が存在し、互いにバランスを取るものだ・・・

もし、遥が変身ヒロインになるとすると、私たちは何から世界を守らないといけないのだろうか?人類から?まさか・・・

「遥さん、あなたにこのブローチを授けます。このブローチに願い

を込めれば、魔法・超能力が使えるようになります。」

ちよつと待った！！人がいるので大声は出せないが、ラファエルのその声を聞いて、私は心の中で叫んだ。

「魔法？超能力？どういうことですか？」

「椎名遥さん、大道寺麻耶さん、浅海沙耶さん。あなたたちにはこれから世界を変えてほしいのです。世界を変え、神の、私が言う神とはいまの人類が信仰している神だけのことではありません。世界は人だけのものではありません。そのことを再び伝えるために手伝つてほしいのです。」

「で、あたしにこれからどうしろというのですか？」
遥が尋ねた。

「それは、あなた方で考えてください。私にできるのはお願いと、その準備だけです。迷い、困ったら尋ねてください。」

そう言つて大天使ラファエルとの交信は切れた。

「・・・どうしよう。」

麻耶が私に聞いてきた。

「どうしようって言われても・・・」

正直、分からない。

「私決めた。私、怪盗になる。」

ええ！！！！なんですか？！それ！！

2002年5月20日 東京都中野区 聖ポール学院高等部校舎
13:30

とまあ、そんな感じで「怪盗ラファエル」は誕生したのです。最初
は新聞やテレビで報道される法に触れた人物の調査とそれで困った
ことになった人からの盗みだったのだけど、なかなか人には言えな
い困りごと相談のHPを作成したのだ。そこでの依頼もよくある。
そしたら最近、「4騎士」と呼ばれるところからメールが届くよう
になって・・・

その情報、正確なのだよね。怖いぐらいに・・・

「今日の放課後、どうするの？」

麻耶が聞いてきた。

「今日？ちよつと用事があつて・・・例の件でね。」

私はそう答えた。

「例の件？ああ、リリアンの人と会つのだよね？成瀬さんのお姉さんだっけ？」

遥がそう言った。同じクラスの成瀬美亜さんと一緒に、今日成瀬さんのお姉さんを紹介してもらうことになっていた。

「リリアンの人か・・・さぞかしお嬢様なのだろうね。」

東京都武蔵野市吉祥寺 吉祥寺駅 17:00

大学の授業もすでに終わり、私は本を読みながらある人を待っていた。ここは、東京都武蔵野市吉祥寺。若者が多く住む街であり、住みたいまちNo.1に輝く街でもある。その吉祥寺の駅前にあるスターバックスコーヒーの店内ではジャズが流れており、落ち着いた空間になっている。

「お待たせしました。」

そう言つて丸テーブルのソファ側に座つた私の正面に、私服姿の女の子が座つた。

「ちよつと遅いのじゃないの？」

そう言つて、読んでいたポール・ケネディの「大国の興亡」をバッグにしまい、私、久瀬絵里は成瀬美

穂に言った。

「すみません。制服から私服に着替えていたもので。」

まあ、確かにリリアンの制服では目立つだろう。私も一応リリアンの卒業生だ。

「で、かわいい後輩の妹の頼みだから今日は来たけど、どうしたの？」

「いま、駅に未亜がいるのです。未亜の友達の案内をお願いしたくて・・・」

まあ、そう言うことだと思った。リリアン時代から、リリアンの生徒にふさわしくないといわれるほど吉祥寺で遊んでいたし・・・健全な遊びを・・・ね。

「夕飯はどうするの？」

「出来れば絵里さまにお願いしたく・・・」

リリアン生らしい呼び方が出ましたね。

「もう私はリリアンの生徒じゃないから、絵里さんで良いよ。そうだね・・・女性4名で食べられるところというところ・・・あそこが良いかな？」

そう考えて私は、携帯電話を取り出してある店に電話をした。

「もしもし久瀬です。ご無沙汰しております。はいはい。そんなあ・・・今日なのでですけど4名で6時に予約できますか？はい、はい。

有難うございます。」そ

う言って電話を切る。

「予約できたよ。最近できたばかりのイタリア料理のレストランにすることにした。」

その時、店の中に見知った顔が入ってきた。

「未亜ちゃん！と・・・沙耶ちゃん！？」

私は驚いた。私の親友から紹介された少年の妹が、そこにいた。

「ええ！！なんで絵里さんがここにいますか？」

「えっ・・・2人とも知り合い？」

そう言う偶然も、たまにはあるものだ、私は思う。

同所 18:00

「

つまりだ。ラファエルが真に求めるのはおそらく、我々が想像しているものではあるまい。」

私がワインを飲みながら言うと、向かいに座った少年はうんうんと

頷いた。なんでも、今日はこいつの母親がどうしても参加しないといけない会合に出席するとかで、晩飯を一緒に食いたいと言ってきた。まあ、こいつと晩飯を食うのは嫌いじゃない。高校時代の自分を見ているようで結構好きだ。私、柊一樹は一浪の末、某S大学の法学部政治学科に今年入学した。まあ、紆余曲折が高校時代からありましたよ。久瀬とはひょんなことから知り合いになり、一応僕の両親は健在だけど、実家が遠いので久瀬の家に厄介になっている。この3年の付き合いで両家とも本当の親戚みたいに仲が良い。で、この目の前の少年、浅海雄彦とは、久瀬の父親が経営している会社のパーティーで知り合った。どうもそういうパーティーは初だったらしく緊張しているのをさりげなくフォローしたら知り合いになった。最も、僕もその時2回目だったのだけど・・・

で、僕が東京に出てからはこういう機会の度に夕食を共にしている。「柊さん、ラファエルの本当の目的って何なのでしょうね？」
「さあな。ただ言えるのは、やつはきつと盗みが目的じゃないってことだけだよな。」

その時、店のドアが開いて若い女性4名が入ってくるのが分かった。ひょいっと顔を上げたら、その先頭の女性と目があつた。

「あ！一樹君！」

そう、その女性は絵里だった。そして、

「お兄ちゃん！！」

その声は麻耶ちゃんか・・・

「すみません。あそこのテーブルと相席をお願いします。」

そう絵里は店員に言うと、彼はテーブルをくつつけて6名用の席をセッティングした。

「ごめんね。ここ、良いよね？」

おいおい、そのセリフはセッティングする前に言うのじゃないのかい？そんな心の中での突っ込みを無視して、絵里たちは席に着いた。「飲み物はどうしますか？」

私は親切に女性陣に質問をする。

「私はグラスの赤。」

「私たちはサンペレグリノをお願いします。」
飲み物の注文が終わると自己紹介タイムだ。

「先に来ておりました、柊一樹です。そこに座っている久瀬絵里の親友？ 婿？ じゃないじゃない。大親友です。」

そう言うとき絵里は頬を膨らませて、周りは少し驚いてそして苦笑した。

「浅海雄彦です。隣に座っている浅海沙耶の兄です。今日はここに来るなんて聞いておりませんでした。みなさん、宜しく願います。ちなみに、聖ポール学院高等部の1年に在籍しております。」
周りからは大人っぽい、との声が出た。

「浅海沙耶です。隣の雄彦お兄ちゃんの妹です。聖ポール学院中等部の2年です。」

「おいおい、その感じはブラコンだぞ。全く……この兄妹はブラコン気味なのだよ……」

「え……と。成瀬美穂です。今年、リリアン女学園の高等部に進級しました。私には姉がおりまして、その姉が絵里さま……じゃなかった。絵里さんと親しくさせていただいております、その縁で吉祥寺を紹介してもらおうと考えたのが今日の趣旨です。すみません。こんな大人数になつてしまっています。」

なるほど、趣旨が分かったら問題はない。

「いえいえ。お気づかい無用です。食事は大人数のほうが楽しい。特にイタリアンは……では、続きをしましょうか？」

「成瀬未亜です。聖ポール学園中等部で沙耶のクラスメイトです。今夜は美穂お姉ちゃんにくっついてきてしまいました。すみません。」

「いえいえ。気を遣わなくてもいいですよ。」

そう言つて、いまにも緊張のあまり泣き出しそうな未亜ちゃんを宥

めた。そうか・・・見知らぬ男性がいるもな。と思う。最後は・・・
「久瀬絵里です。そこに座っている一樹とはここ3年一緒の腐れ縁
です。リリアン女学園を卒業しましたが、リリアン生に思われない
ことが悩みです。」
そりゃそうだ。あんたの秘密を私は知っている・・・

同所 21:00

中高生を20時に帰宅させて、私たちはあるアイリッシュ・パブで
飲み直していた。

「まさか、レストランで会うとはね・・・」

私はさっきまでの光景を思い出しながら言った。

「全くだ。しかし、あのか弱そうな未亜ちゃんがあんなに食べると
はね。」

そう、未亜ちゃんは実は結構な大食いだったのだ。それにはびつく
りした。

「まあ、人はみかけによらないということさ。」

そう言つて、一樹はフィッシュ・アンド・チップスに手を伸ばした。
「うん。いける味だ。」

ここに来るのはずいぶん久しぶりだ・・・2003年以来かな？

「変わらないね。ここのギネスも、キルケニーも・・・」

そう言つて私はギネスに口をつける。

「で、どうだった？大島さんは何か知つてそう？」

「いや駄目だね。」

そう言つて一樹は手を振るジェスチャーをした。

「市ヶ谷は全然情報を持っていない。これで持っていない問題だけ
ど、あそこがないとなると・・・海軍省にはコネクション、ある？」

「ないのだよね・・・」

そう言つてため息をつく。私たちはある会社で嘱託としてこの4月
から勤務をしている。ひょんなことから知り合った、大島さんとい

う人のルートを使って例の怪盗ラファエルの情報に食い込めるかと思っただけど・・・

「虎ノ門ラインはだめだわ。海軍省関係も記憶がない・・・」

「そうか、全滅かぁ・・・」

そう言つて、再びギネスに口をつける私。ハノイのギネスもそれはそれでうまかったのだけど、やっぱり生が一番。

「ところで、俺らの知りあいって結構シスコンとブラコンが多いと思わないか？」

一樹がいきなり話題を振ってきた。

「まあ、そうかもね。」

私は曖昧にして答える。

「まあ、話を戻して、なんで経済分析専門のうちでこの問題に興味があるのだろう？」

いう一樹に私は自分のバッグから一枚の紙を取り出し、差し出した。それを軽く読み一樹は内容が理解したようだ。

「なるほど。これは経済問題だわな。」

「そう言うこと。だから虎ノ門と海軍省に関心が行くわけ。」

後々考えると、この段階で事態の全容をおぼろげながら把握していたのは私たちだけだったと思う。

5月21日 東京都千代田区 警視庁本庁舎 10:00

「

怪盗ラファエル特別捜査本部」が設置されてから早一週間か・・・そう思いながら、書類を整理していると部下の担当官が声をかけてきた。

「管理官、この書類をどこに置きましょうか？」

「その書類はあの棚に仕舞って。」

そう指示をして、私はコーヒーを口に含んだ。苦い。豆の苦みが出

すぎている。私、警視庁刑事部本庁捜査二課管理官、高宮由子はコーヒーを持って立ち上がり、窓の外を見た。皇居が見える。

「管理官。今日は神奈川県警の派遣部隊が着任します。」

「昨日は千葉、今日は神奈川、明日が埼玉ですね。」

部下の報告に私は確認をする。

「はい。しかし、どの県警も刑事部のエリートを送りこんできましたね。想像とおりですが。」

「部長の言葉にもあつたでしょう。我々はオール警察軍でこの事態に当たらねばなりません。所轄・本庁・他県警の垣根を超えないと我々はやつを捕まえられないのです。」

そう言っているとドアが開いたようだ。

「管理官、神奈川県警の方が来ました。」

そう言つて、係の者がやつてきた。

「通してください。」

そう言つてその人間を下がらせた。しばらくすると再びドアが開いた。

「高宮警視はおられますか？」

「私が高宮です。」

私は、自分から名乗り出ることにした。横浜でも本件、事態が発生しているため神奈川県警の協力は不可欠だ。

「自分は、神奈川県警より派遣されました小酒部であります。」

そう言つて、小酒部氏は敬礼した。自分も返礼する。

「小酒部さん、お名前は何回か聞いたことがあります。うちの内海と何回か一緒に仕事をしたとか？まあ、かけてください。」

そう言つて私は小酒部氏に席を勧めた。

「すみません。」

そう言つて座る小酒部氏。

「何か飲みますか？あいにくコーヒーは豆が古いせいか少々苦いですが・・・」

そう言つて笑いながら飲み物を進める私。

「そうですね。私は紅茶党なので、出来れば紅茶を・・・」

「分かりました。誰か、私と小酒部さんに紅茶を！」

そう言つて係の者にオーダーする。

「神奈川県警から何名出向になったのですか？一応確認です。」

「各県警から4名。警視庁から専属班で7名の計23名だと聞いております。」

「それに私と千葉さんが加わり、計25名で捜査をします。最も、いざ状況が発生したら、各所轄から動員をかける予定ではありませんが・・・」

係の者が来て、2つ分の紅茶を私たちに渡した。

「どうもありがとうございます。だいぶ警視庁も叩かれているようですね。」

そう言つて小酒部君はスポーツ新聞を取りだした。

「まあ、この様ではしょうがないですよ。こっちの裏をかいてやつはやってきます。それをどうするかを考えねばなりません。」

「しかし、どうやってやつは情報を収集するのでしょうか？それが疑問なのです。」

「そうですね。我々へは警視庁の問い合わせメールに送りつけるのに、そもそもなぜその所へ盗みに入るのか？その情報をどう収集するのか？それが疑問なのです。それが分かれば、後を追えるのでしょうか・・・」

そう言つて私は唸った。そう、この怪盗ラファエル事案の最大の困難は「足跡」が全くないこと。指紋・声紋はおろか靴の足跡すらない。しかも、盗みに入る場所の情報をどう收拾するのかさえも現段階では不明。鑑識もお手上げと来ている。

「科警研は何と言っているのですか？」

「同じことです。声紋を何回か収集したのですが、そのたびに違う結果が出ておまして、複数犯説を唱える者もいるほどです。」

「監視カメラは？」

「通常のカメラに加えて赤外線感知カメラも使用しましたが、映っていないのです。肉眼では皆見えているのに、ですよ。もうここま
で来ると本当に天使がいるのではないかと思うほどです。」

そう言つて私はため息をついた。

「天使、ですか・・・ラファエルとは確か、「癒し」の意味でした
ね？」

「だと聞いています。私もそれほど詳しいわけではありませんが・
・」

天使、か・・・なんという皮肉だろう。

「いずれにしても、これから私たちはあなたの指揮下に入ります。
よろしく願います。」

そう言つて小酒部君は私に手を差し出した。

「宜しく。」

そう言つて、私たちは握手をした。

某所 11:00

「なるほど、明日で刑事部は陣容が整う訳ですな。」

電話口から声が聞こえてきた。

「そうなります。警察はこれで陣容が整いました。」

「あなたのことだ。すでに手のものを送り込んでいるのでしょうか？」

「その点は抜かりなく。」

「さすが、カミソリと異名をとるあなただ。手が早い。」

「駒をここで欠けさせるわけにはいきませんよ。」

そう言つて私は笑う。

「そう言えば、あなたのご友人が4月の人事で刑事部に異動になつ
たそうですね。」

彼女のことが。

「ええ。ただ捜査一課関係らしいですよ。この件には無関係ですな。」

「なるほど。では、今日の夕刻にいつもの方法で連絡を行うということでしょうか？」

「来月の送金、どうします？」

「いつもの通りに行いましょう。手はずは整っています。」

「やはりこの件に関してはあなた方のほうが専門家だ。」
私は苦笑して返した。

「では、宜しくお願いします。」

そう言って私は電話を切り、自分のPCに向かった。

「件名：下記依頼の件に関して。」

「先日来お願いしております件に関して」私はメールを書き始めた。

1-2 そして役者はそろった。

2002年5月21日 東京都中野区聖ポール学院礼拝堂内 1

7:00 視点：沙耶

私はノートPCの画面を開き、メールボックスをチェックした。やつぱり、あった。

4騎士からの依頼状。ここ最近相次ぐ解決要請の依頼だ。その4騎士が何者なのか、私は知らない。

怪盗ラファエルがこれまで行った依頼は12件に及ぶ。最初はこの礼拝堂に来る人の悩みを聞いていたのだが、3月ぐらいからこの4騎士の依頼が多くなってきた。4騎士、麻耶の話では「ヨハネの黙示録」に登場する滅びの騎士らしい。そんな悪趣味な差出人はどのどいつなのだろう？そんなことを考えながらメールを呼んでいると、麻耶が口を開いた。

「この4騎士つて、きつと白馬に乗った王子様みたいなものなのじゃないかな？」

私は、飲んでいたコーヒを噴出した。幸い、誰も正面に座っていない。

「ちよ、ちよつと沙耶汚いよ！」

遥が抗議の声を上げる。

「あのね、この4騎士は聖書のヨハネの黙示録の4騎士じゃないかって考えているの、わたしは！なんで疫病とか飢餓を司る騎士が白馬に乗って御姫様を迎えに来る騎士と一緒にいるの!？」

「だって、騎士といえば白馬。白馬に乗った王子様じゃない！」

時たま麻耶の考えが分からなくなる。この3人の中では遥はまだましだ。麻耶は時たま、あほの子じゃないかって思うことがある・・・で、話を戻すと今回の依頼はこのサファイアの奪還なわけだね。」
遥、ナイスタイミング。私は話を戻すことにした。

「今回の依頼は、 商事代表取締役・小田修誠氏の自宅からの奪

取。この代物は、バブル崩壊前に地上げで買収した家から不当に持
つていったものらしいよ。なんでも、家と土地の所有権がすでに小
田の会社にわたっていることを口実に返還に応じないらしいので、
民事で争って訴えたほうの敗訴。」

「なんで？」

麻耶が聞いてきた。

「やっぱり所有権は小田側に渡っていたらしい。ただ、小田の会社
の財務内容がバブル崩壊後急速に悪化したらしくて、この宝石を海
外の特に中東の石油成金に販売するらしいよ。明日の夜、成田発チ
ヤナエアで香港に出国するのだった。」

「じゃあ、今日の夜しかチャンスはないわね。いつも通り、警視庁
のメールアドレスにメールして。あたしの活躍をアピールするのよ
！！」

始まった・・・なんでそんなリスクを冒すかなあ...と私は思う。ス
パツとやってスパツと帰ってくればいいのに・・・そこそこ。麻耶
あんまり遥をおだてるのじゃない。あんまりおだけるとすぐに遥は
調子に乗るのだから・・・そう思って、私はメールの文面を作成し
た。

東京都千代田区霞が関 警視庁本庁舎 同時刻 視点：由子

「管理官！ たった今、ラファエルからの予告状がメールに受信され
たとの連絡が総務課よりありました。すぐに転送するそうです。」
ついに来たか！ 私はそう思った。胸の高鳴りを感じる。私にとって、
ラファエル事件は単なる事件じゃない。頭脳と頭脳の戦いだ。いう
なれば、チェスのゲームに似ている。

「高宮管理官。管理官！！」

「え！？」

「どうかされましたか？ 少し変な表情をされていたので・・・」
どうも表情が顔に出てしまったらしい。部下が心配して話しかけて
きた。

「有難う。なんでもないわ。それより、理事官に連絡して、捜査本部の立ち上げ準備を！」

「メールが来ました！」

捜査本部全体のマイクシステムがオンになった。担当の読み上げる声が聞こえる。

「予告状。From怪盗ラファエル to警視庁の皆さま。CC

商事代表取締役・小田修誠様。今夜19時。中野区 商事社長室よりサファアを頂きます。byラファエル。とのことです。」

その報告が終わり、一瞬の静寂の後捜査本部は騒がしくなった。

「中野署に現地対策本部を設営！」

「内海班は中野へ急行。所轄も動員して 商事周辺の警戒に当たれ！」

ゲームの始まりだよ。ラファエル。今度こそ、私は君を逃しはしない。そう思っていたところ、対策本部のドアが開き、千葉理事官が入ってきた。千葉さんは周りの邪魔にならないように注意をして、私のほうに歩いてきた。

「準備は進んでいるようね。」

「まあ、ですね。今回は中野ということで、車両はあまり使えないでしょう。自転車が中心の警備になると思います。」

「拳銃携帯許可、申請する？」

「いや、止めておきましょう。今回発砲したら民間人を巻き込みかねません。」

本当は催涙ガスぐらいほしいのだが・・・

「さっき部長に話をしてきたわよ。部長からの言葉。しっかりやれ、だつて。」

そう言つて千葉さんは笑った。

「最善は尽くします。いま、17時半ですよ。間に合うかな・・・」

そう言つて私は時計を見た。ラファエルのやつ、時間がないぞ。

「理事官。内海班はすでに出動しました。直接 商事入りすると

のことです。」

「了解しました。 商事と連絡は付いたの!？」

「連絡が付きました。 警備許可、出ています。」

こっちサイドは問題ないか・・・後は、これを指示するだけだ。

「今回の対策本部は時間がない為、ここに設置します。」

このゲーム、多分我々の負けだな。時間がない。

東京都中野区中野ブロードウェイ 18:00 視点:雄彦

たまには中野もいいものだ。アキバにはないものがある。そう史彦とブロードウェイ前のマクドナルドでコーラを飲みながらそんな話になった。まあ、確かにそうだ。

「で、どうなの?今朝の話なのだけど。」

そう言つて史彦は今朝の話を再び振つた。幕度の店内は僕たちと同じ中高生でにぎわっている。まあ、ファーストフード店なんてこんな感じなのだろう。どこでも。

「ラファエルの件?」

「そうそう。」

「この間、知り合いの人とその話をしてね。彼曰く、義賊であれ強盗であれ人のものを盗むという行為と人の住居に不法に侵入するという行為には変わりはない。よって、いくら奴に正義があるうとも法の下での正義はない。と言っていたよ。」そう言つてジンジャーエールを飲んだ。史彦の顔が笑つた。

「多分そうなのだろうね。盗む奴、盗まれるやつ、奪われた奴。それぞれに正義があるということなのだろうな。最も、僕は盗む奴を応援するけどね。」

「なんで?」

僕は首をかしげた。

「いいかい。ラファエル事案に関してはきつと何か裏がある。僕はお前さんが知っているように陰謀論者じゃないけど、この件に関しては陰謀があるような気がする。まず、なんでこんなに正確に場所

が特定できるのだろうか?」

確かにそうだ。それは当然の疑問としてある。どこかに内通者がいるのかそれとも・・・

「そして、そこにはおそらく権力の香りがする。権力にはしがみつくものなのだよ。」

そう言つて史彦は大笑いした。私は苦笑した。こいつは昔からそうだ。

「権力は有効に生かすべきものだ。その中にいれば、情報を自然と入手できる。後はその情報を如何に分析するか。それが問題なのだ。」

史彦とは初等部以来の付き合いになるが、僕らはよほど気が合うらしい。よくつるんで話をしている。まあ、こんなような話だが・・・

その時、けたたましいパトカーの音が何台も聞こえてきた。

「今日はここがショーの舞台らしいな。ラファエルさんよ。」

東京都千代田区霞が関警視庁内ラファエル捜査本部 同時刻 視

点：由子

「管理官、あと1時間です。」

スタッフの呼ぶ声が聞こえてきた。壁にかかっている時計を見ると18時。予告の時間まで、後1時間だ。

「内海警部他捜査班、現場に着きました。配置につきます。」

「中野署から応援部隊、現着。配置につきます。」

駒の配置は終わった。問題は、その駒をどう動かすかだ。私は机に向い、PCを立ち上げた。ウィンドウズの表示が出たところで、自分の内線電話が鳴った。私は、それに手を伸ばした。

「管理官、南雲参事官よりお電話です。つながります。」

「お願いします。」

そう言つと、しばらくのちに南雲さんのいつでも冷静な声が受話器を通じて聞こえてきた。

「ああ、由子ちゃん。私です。南雲です。」

この人は人前では私のことを、高宮さんと呼んでいる。大学の先輩に当たるのだが、どうも私はこの人は苦手だ。嫌いではないのだが・

「南雲さん。どうかしたのですか？いま、ラファエル事案の対処で忙しいのですが・・・」

「その件なのだけどね、うちのほうでも関心があるのよ。小田って男、どうも不動産投資のほかに、ある一件に絡んでいるらしいのよ。」

なるほど、小田の件ですか・・・

確かに、ラファエル事件はその事案のみよりも事案終了後の後始末が忙しくなることが多い。この調子でいくと、外為法が何かの違反だろうか？でも捜査一課を主にみている南雲さんが、いったい何なのだろう・・・

「これはある筋から聞いた話なのだけど。」

そう言っつて南雲さんは話し始めた。なるほど、後藤さんならみか。

南雲さんがある筋と言っつて話を始めるのは、大抵後藤さんならみの事案の件だ。

「小田、バブル期に関東のあちこちでレジャー開発を行っていたらしいのよね。で、その中の数か所がある宗教団体にバブル後に買ったかれたという話を公安が持つていてね。まあ、95年のようなことにはならないとは考えているしそうするつもりだけれども、どうも気になつてね・・・情報提供よ。」

私は南雲さんにお礼を言い、電話を切った。そして、その内容を千葉さんに報告した。千葉さん葉さん、私と警視庁の中でもまだまだ数の少ない女性の担当官だ。そして、南雲さんはその先輩に当たる。そう言うこともあつて、私たちはよく情報を交換し合っている。千葉さんはその報告を聞いて、顔をしかめた。

「これは検察庁あたりが動いているかもしれないわね・・・」

「はい。これまでの事案を考えると、検察庁の内定がほぼ終わって

いるかもしれません。」

「にしても、宗教団体とはねえ・・・」

「念のため、社内にも配置しておりますので対処は可能です。」

そう言っただけは時計を見た。残り、後30分。会議室内はPCの音や通信機から流れてくる捜査員の話声等でますますうるさくなっていたが、私たちの周りだけ音の無い世界のようなだった。

東京都中野区聖ポール学院礼拝堂内 18:30 視点：遙

「それじゃあ、行つて来るね。」

私はそう言っただけ、礼拝堂の椅子から立ち上がった。テーブルの上にはそれまで飲んでいた缶入り紅茶が置いてある。それを沙耶が取った。

「駄目だよ。ごみはきちんと捨てなきゃ。」

そう言っただけ、自分の持つていくゴミ袋に缶を入れる沙耶。知っている？沙耶。あたしはそう言うあなたの几帳面な性格が好きなの。無論、LoveじゃなくてLikeよ。あたしには百合っ気はないわ。あたしは、礼拝堂中央にある十字架の前までやってくと跪いて、胸のブローチを両手で持った。

「契約、発動！」

そう言っただけ、あたしの体のあちこちが少し大きくなった。でも、髪は変わらずにポニーテールになっている。あちこち変わったことでスタイルもよくなった。このまま外に出ればきつとスカウトされるねって、沙耶に行ったら怒られたっけ・・・

眩しい光とともに服も体に密着した黒のスーツに変わり、胸と胸との間に二つの光源が加わる。一つは残りのシンクロエネルギーを、もう一つはあたしの生命エネルギーを示しているものらしい。なんでもラファエルが契約時に言うには、シンクロエネルギーはあたしの残りの魔法使用可能エネルギーを示しているらしい。契約を解除しないで、シンクロエネルギーが尽きたときは、素っ裸になってしまうらしい。それは嫌だ。で、生命エネルギーは文字通りあたしの

残りの生命エネルギーを示している。そのどちらもがなくなつた時、あたしは死ぬとのことだ。

「なんでやねん！なんでそんな某M87星雲から来た光の巨人みたいなことになるんや！」

となぜか関西弁で突っ込んでいた。あたしがよくボケているとあなたは言うけど、沙耶の突っ込みも時々飛んでいるとあたしは思うよ、沙耶。で、麻耶。あなたそんなきらきらした目であたしを見ないで頂戴・・・なんだか気恥ずかしくなってしまうから。

契約発動という名の変身が終わった。特撮番組ならここであたしは名乗りを入れるべきなのだろうけど、あたしはしない。最初はしようと思つただけ・・・

「ダメダメダメ！なんで名乗りなんてするの！そんなのみすみす自分の情報を教えるようなものじゃない！」

そう言つてやつぱり沙耶が反対した。まあ、沙耶があんまり強硬に反対するのでやめたのだけど、その代わりに予告状とあたしの契約後の姿を決めさせてもらった。

「エンシエル・シャイン、行つてきます。」

「行つてらっしゃい。いつも通り、私たちはここで待っているね。」
そう言つて手を振つて送り出してくれる沙耶。

「気をつけてね。天使ラファエルの加護があらんことを」

そう言つて送ってくれる麻耶。あたしにはこの2人がいてくれる。だから、いつでもあたしは前向きに全力全開でがんばれるのだ。

東京都新宿区JR市ヶ谷駅前 グランドヒル市ヶ谷 同時刻 視

点：絵里

私は市ヶ谷駅前にあるホテル、グランドヒル市ヶ谷のティールームである人物を待っていた。市ヶ谷駅前という立地上、ところどころ自衛隊の制服を着た人にあう。制服萌えではないが、私は制服が好きだ。いま、待っている人間もどちらかというと制服が似合う人だ。

「お待たせしました。」

キッシンジャーの「回復された世界平和」を原著で読んでいた私に声をかける人物がいた。待っていた男性だ。

「いいえ。お久しぶりです。大島さん。去年はワシントンでお世話になりました。」

「いいえ、こちらこそ。ペンタゴンの見学ぐらいしかできませんでしたがいかがでしたか？」

そう言う大島さんに私は満面の笑みを浮かべて言った。

「なかなか国防総省を見学できるものではないですね。」

最もその後、ニューヨークに移動して私は地獄を見た。

「私でペンタゴンの見学も最後ですか・・・」

そう言っただけ私はボーイに声をかけて、コーヒーの新規の注文とお代わりを注文した。

「で、御用件は？」

私は大島さんに尋ねた。昨日、大島さんから私の携帯に連絡があったのだ。父の知り合いでもある彼の要請をむげにはできない。

「絵里ちゃん、これは極秘の部類に入るのだけど・・・」

そう言っただけ、大島さんは話を始めた。とりあえず、私の情報保持リンクで問題ない部類の話をするらしい。

「上からの指示で、ラファエルの調査をすることになったよ。」

「ふーん。」

私はそつけない態度をあえてとった。そして、頭の中で考える。国内の犯罪案件にしか過ぎないラファエルの案件を市ヶ谷が調査するとはこれ、如何に・・・

「絵里ちゃんの力を借りられないかってね。そう思って連絡したのだ。」

そう言っただけ、やってきたコーヒーを飲む大島さん。

「とりあえずは遠慮します。大学も始まったばかりですし、何せ非常勤勤務も忙しいので・・・」

「そっか。じゃあ、気が向いたら教えてよ。」

そういつて、話を昨年のワシントンでの思い出話をする私たち。でも、私は考えている。何是市ヶ谷が興味を示すのだ……？

東京都中野区ＪＲ中野駅前 １９：００ 視点：遙

「フライ・エンド！」

あたしはそう唱え、背中から生えている羽を消した。もちろん、椎名遙に羽は生えていない。エンシエル・シャインになって、「フライ」の魔法を使うときにだけ生えて空を飛ぶことが出来る。１月に契約できるようになって一カ月、あたしは魔法の練習をして、マスターすることが出来た。沙耶からはよく、「あなたは意志が強いよね。どんなことでもくじけないよ。すごい。」

とほめられる。それはそれですごく嬉しい。でも、一番うれしいのは、「遥つて、すごくかつこいい。前向きで、諦めないでなんでもするじゃない。」という麻耶の言葉。

でも、あたしは知っている。沙耶も麻耶も負けず嫌いで諦めが悪い。あたしと一緒に。だから、あたしはやる。やって見せる。

明るい中野の街の中にあつて、商事が入居しているビルの屋上は暗い。あたしはそこに降りると、素早く「サイレント・アンド・シャドウ！」と唱え、ビル内に入る。これであたしの姿も音も警察に察知されることはない。何もわからない警備の警官のわきを抜けて、あたしは社長室の前に来た。声が聞こえる。

「小田社長、貴方にはお世話になりました。」

女性の声だ。

「大尉、これは一体どういうことですか？」

脅えたような男性の声が聞こえる。おそらく小田の声だろう。

「小田さん、バブル以来貴方にはお世話になりました。でも、貴方にもう用はないのです。ここで、消えてください。」

「断る！」

小田の大きな声がした。警察はどこにいるのだろう？気付かないのだろうか？

「そうですね・・・あなたが明日の夜、香港に出国すると聞きましたので、せっかくですので足を延ばしてペナンかどこかでしばらくいていただこうと思ったのですが・・・残念です。」

「ちょ、ちよつと待ってくれ!」

そう言っつて社長室のドアが開いた。チャンス、とあたしは考えてまんまと社長室に侵入した。入れ替わりに小田がほうほうの体で出てきた。どうやらトイレに駆け込むみたいだ。

社長室の応接のテーブルの上に、目当てのサファイアがあった。そして、あたしは周囲に気を配る。そのテーブルの向かいにあるソファに、女性が一人座っていた。ビジネススタイルの、きれいな女性だ。サファイアのわきには、航空券らしきものが見える。さっきの話の件のものだろう。大尉と呼ばれたその女性は、あたしに気付いていない。そりやそうだ。胸の光源を見る。まだ、シンクロエネルギーはたっぷりある。そんなことを考えていると、小田が応接室に戻ってきた。

「考えはまとまりましたかな?」

「はい。私はあなた方には屈しませんよ。絶対に。」そう小田が言いきった。

「そうですね。それは残念です。」そ

う言っつて、大尉はスーツの内ポケットからピストルを取り出し、小田の額に当てた。

「さようなら。小田さん。」

銃声が部屋に響いた。

東京都千代田区霞が関警視庁本庁舎 19:30 視点:百雨

「緊急、緊急。 商事本社ビルで銃声!」

その声に、ラファエル対策本部は恐慌状態になった。今回の件はしくじった。まず、本社ビルの中での警備が断られた。あくまで、我々は捜査をする側で、被害者になる方に協力を要請することしかで

きない。つまり、立ち入りを断られたらそれまでなのだ。

「理事官、一課に連絡してください。」

そうだった。私は慌てて捜査一課直通ダイヤルを回し、応援を要請する。しかし、なぜ今回発砲になったのだ？私は、状況を整理しようと努め、情報をもっと出すように指示を出した。

東京都中野区 商事本社 同時刻 視点：遙

いま起こったことが信じられない。状況を整理すると、大尉と呼ばれる女性が銃口を小田に向け、発射した。その結果は・・・あたしはショックのあまり言葉が出なかった。でも、次の瞬間には正気に戻ったあたしは、サファイアに目を向けた。

「いるんでしょう？エンジェル。」

冷たい、感情の無い声がした。

「よくわかったわね。」

あたしはサイレントとシャドウを解除し、人殺しに向かい合った。

「どうもはじめまして。ラファエルさん。こんな形で会うとは思わなかったわ。」

「そうでしょうね。あたしもこんな形で会いたくはなかったです。」

「あなたの目的はそこにあるサファイアなんでしょう？」

あたしは無言で答える。

「いまはあなたと会う必要はないよね。」

「どういうことですか？」

あたしは身構えていた。

「そう言うことよ。」

そう言うで大尉は窓を破って外に飛び出した。ここはビルの5階、普通の人間なら助かるはずはない。慌てて、窓の外から見たものは、あたしが契約したような形で背中から羽の生え、空を飛ぶ女性の姿だった・・・

東京都中野区JR中野駅付近 19:50 視点：遙

あの後、あたしはサファイアを持って再びサイレントとシャドウをかけると、室内に突入した警官と入れ違いに正面からビルの外に出た。周囲はすでに多くのパトカーがいた。

「なんなのよ、あれは・・・」

幸い、まだシンクロエネルギーはある。あたしはビルから少し離れたところで魔法を解除した。契約後の、すこし大人びた姿のあたしは中野の街を歩く。やっぱり、警官が多い。

同所 同時刻 視点：雄彦

警察車両の音がうるさい。上空にヘリが飛んでいるようだ。史彦と二人で中野駅の南口の商店街を歩いていた。どうも尋常ならざる警察官の数だ。

「何かあったのですか？」

僕は近くにいた警察官に尋ねた。

「この近くのビルでラファエルが現れました。そして、殺人事件が起きました。」

「有難うございます。」

そう言っ僕たちはその警官から離れた。数メートル歩くと、僕は何かの違和感に苛まれた。

「なあ、さっきの警官、やけに状況に詳しくなかったか？」

「僕もそう思う。サイレンの音が鳴りだしてからの時間を考慮すると、そこまで知っている警官がいるのだろうか？」

そう言っ振り返る僕らの視線の先には・・・さっきの警官はいなかった。その代わりに、女子大生ぐらいだろうか？髪は黒のポニーテールで、ビジネススタイルで、それでいてミニスカートをはいた女性が僕の視線に映った。直感だったのだろう、僕は叫んだ。

「怪盗ラファエルだ！史彦、警官を呼んでくれ！！」

僕は、ラファエルを見た初の人間になった。

1 - 3 編集後記

はい、どうも。

みなさんはじめまして。腹黒伯爵と申します。

このたびは、自分の処女作、「怪盗ラファエルを捕まえる!」をご覧いただきありがとうございます。

小生、いまだ未熟者にて、文法・誤字脱字が多と思います。そんな時には感想欄で教えていただけると助かります。

また、感想などもお待ちしております。

皆様の応援、よろしくお願いいたします。

筆者・拝

次回予告

第2話「そして役者は演目を始める。」

怪盗ラファエル発の目撃者として強引に警視庁の囑託にさせられた雄彦。史彦の補佐とラファエル捜査本部の温かい支援を得ることに成功する。

その裏では、尊敬する2人の裏工作があった。

ラファエル捜査本部と雄彦、史彦は一計を案じ、浜松町の放送局で宣言する。

「怪盗ラファエルに告ぐ。予告状はこの私に直接出すように。」
そして出される予告状。練馬区を舞台に、今演目の幕が開く!!!

2 - 1 そして役者は演目を始める。(前書き)

ええつと・・・

これからの話の中で、実際に起こった事件・事故が出てくる場合があります。また、それを引用することがあります。

それはあくまでフィクションの中での話であり、その関係者の方々に不快にさせるものではありません。

不快になられた場合はご連絡いただけますようお願いいたします。

著者・拝

2 - 1 そして役者は演目を始める。

2002年5月24日 東京都千代田区霞が関 警視庁本庁舎

17:00 視点：雄彦

どうしてこうなったのだろうか？僕は自問した。目の前には、警視庁幹部の何人かが座っている。で、僕の後ろには御手洗が座っている。何かの尋問だろうか？

「浅海雄彦君だね？私は警視庁の黒崎だ。刑事部長を務めている。」

「千葉です。警視庁刑事部の理事官です。」

「浅海です。はじめまして。」

警視庁の刑事部長か・・・そんなお偉方がばくに何の用事だ？

「報告によると、君は変装していた怪盗ラファエルの姿を見破ったと聞く。実はうちの捜査員は誰もまだ見破ったことがないのだよ。なぜ君は見破れたのかね？」

そんなこと聞かれても困る。正直な話。

2002年5月21日 東京都中野区JR中野駅前 18:50

視点：遙

「待て！あいつが怪盗ラファエルだ！」

そう叫ぶ声が聞こえた。あたしは動揺してその場から走り出した。契約発動時、あたしの五感研ぎ澄まされる。最も、視力はよくなくなるわけじゃないからメガネをかけているのだけど・・・そのメガネの先がある人物を捕らえた。そうじゃなきゃあたしはその場にとどまっていただろう。その人物は、沙耶の兄、雄彦さんだ。あたしもよく沙耶の家に遊びに行くから会っている。ごまかせる自信はない。「あいつがラファエルです！」

同じタイミングで似たような声が聞こえる。こっちは御手洗さんだろう。御手洗さん、雄彦さんと同じクラスの友人で、沙耶の家でよ

く会う。この二人ならあたしのことをすぐに見抜いてしまうだろう。あたしは沙耶と麻耶の待つところへ戻るべくノイズの魔法を使い、騒音を出して混乱させる作戦に出た。

2002年5月24日 東京都千代田区霞が関 警視庁本庁舎
17:00 視点：雄彦

「とまあ、そこでロストしたわけです。」

僕の説明に黒崎さんは納得したようなしてないような複雑な表情を浮かべていた。そりやそうだろう。一介の高校生がいま巷を騒がしている怪盗の正体、しかもこれまで警察は誰も見ていない！ものを見ましたっていうのだから、納得するほうが不思議だ。でも、あの後史彦と話をした際に当然話をした。

「なんで僕らだけラファエルだとすぐに気付いたのだろうか？」

これまでラファエル事案が発生すること10数回、警察はそのたびに超高感度カメラやら赤外線追尾カメラやら暗視装置やら果てはNシステムで使うカメラまで持ち出してきたというのに、姿を見たことがないという。ラファエルは文字通り天使なのだという警察官までする始末らしい。

僕は隣に座っている千葉理事官の顔を見た。困惑している。この事態に、だろうか？それとも一介の男子高校生2名を放課後の学校から任意同行同然でしょっぱいてきたことに、だろうか？

視点：百雨

正直なところ、私は困惑している。一介の男子高校生をこの事案に巻き込むことに関してだ。それは今日の午前中のことだった。私は、黒崎部長に呼ばれて部長室を訪れた。

「千葉です。入ります。」

部屋に入ると部長は私に応接のソファに座るように指示をした。

「早速だが用件を話そう。先のラファエルの案件の際、ラファエルの正体に気付いた高校生がいたそうだね？」

「はい。そう言う報告が上がってきております。」

「先ほど総監と都公安委員会委員長と話をしたのだが、彼をうちの囑託として招こうと考えている。」何を言ったのだ？部長は？高校生を囑託として招く？

「部長。前例がありません。しかも囑託で高校生を？」

「やむをえぬ処置だ。」

そう言う黒崎さんは笑っている。このおっさん、状況を楽しんでいやがる。私は内心、この部長を馬鹿にした。

「部長のご指示であればやむをえません。」

そう言つて、妥協せざるを得なかった。少年、申し訳ない。君を警察に招くことになりそうだ・・・

2002年5月25日 東京都武蔵野市吉祥寺 13:00 視

点：一樹

その日は土曜日だった。大学の講義もなく、非常勤で勤務している会社の仕事もない僕と絵里は自宅に知り合いの中高生を招いて昼食を一緒にすることにした。僕の家、より正確に言うのであれば久瀬家の家は閑静な東京の住宅地、武蔵野市の吉祥寺にある。絵里の母校リリアン女学園までバスで1本、大学までは自転車ですぐのところに家はある。昼食はパスタにすることにした僕以外はほとんど女性とは言え、その食欲たるやすごいものがある。

とはいっても、調理をするのは絵里にお任せして、僕はペリエを飲みながらサラダの準備をしていた。ちなみに久瀬の両親はいま中国に行っている。なんでも、中国市場の情勢調査らしい。中国ね・・・

「ほらほら、中国市場の動向を考えている暇があるのだつたら手を動かして準備をして！」絵里に怒鳴られた。その時、チャイムが鳴る音がした。パスタのゆで時間を計算している絵里の代わりに、僕が出る。おいおい、これじゃあ新婚家庭みたいだな。そんなことを

考えていると箸が飛んできた。

「ちよつと！新婚家庭って何よ！」

はいはい。この関係は円熟期の家庭ですよね。そう言って受話器をとる。

「遅れてすみません。早乙女です。」

一番乗りは早乙女さんとこの二人か・・・あその家は揃いもそろって優等生、委員長タイプの姉妹だからこういうときには来るのが早い。ロックを解除して、玄関で出迎える僕。

「いらつしゃい。彩里さん、綾奈さん。」

「本日はお招き有難うございます。これ、つまらないものですがどうぞ。」

そう言つて高野のケーキを差し出す彩里さん。彩里さんが高校三年生で綾奈さんが高校一年生。まあ、オガサワラの関係もあり、軽井沢で最初に会ったのを契機にばくも親しくしている。いろいろ思うところ、考えることがあるらしい。軽井沢後は絵里を彩里さんは崇拜しているようだ。妹の綾奈さんも絵里を崇拜している。おいおい、うちの絵里ちゃんは偶像崇拜の対象じゃないのだよ・・・

ダイニングに案内し、二人にお茶を進めていると再び呼び鈴が鳴った。再び受話器をとる僕。

「どうもお！成瀬です！」

賑やかな、もとい。とんでもなくうるさい三姉妹の声が出た。成瀬姉妹は3人姉妹。姉の歩さんが絵里の一つ下。次女的美穂さんが今年高一で末っ子の美亜さんが中二。まあ、元気のいい姉妹ですわな。元気が良すぎて困ってしまう。特に美穂・美亜の姉妹はまあ、うるさい。そんなかましい三姉妹をダイニングに案内する。先に来ていた早乙女姉妹とハイタッチをする三人。まあ、歩さんと彩里さんは生徒会で先輩後輩の間柄で、今もこうやってうちでよく合っている。うんうん。いつ見てもかましい光景だ。そんなことを思っ

いたら今度はフォークが飛んできた。絵里さんや絵里さんや、非常に危ないのじゃないですか……

そんなぼくに天使が降りてきたらしい。呼び鈴が鳴って、僕は走って受話器をとる。

「どうも、一樹さん。浅海・椎名家です。」

来た来た。今日の主役が。おとこの夜、絵里の形態に虎ノ門さんから電話がかかってきた。なんでも、浅海雄彦という男子高校生の情報がほしいとか……まあその話は食後にしよう。僕は3人を出迎えるべく玄関に向かった。後もう2組来るのだが、その中でもぼくは雄彦が一番気に入っている。雄彦は僕に似ている。そんな気がする。

1999年7月末 長野県軽井沢町 西園寺家別荘 18:00

視点：一樹

新潟からぼくを呼んだのはこの為だったのか……内心、うんざりした。

去年の秋、僕はある人から連絡をもらって新潟駅で待ち合わせをした。新潟出身で、高校卒業・浪人卒業まで僕はそこで暮らしていた。あるとき、同じ年ぐらいの女性から電話があつた。その人は久瀬絵里という女性だった。新潟駅の改札で待ち合わせとのことで、僕は待っていた。正直、すぐに見つかるとは思っていなかった。でも、絵里さんはすぐに僕のことがかつたらしい。駆け寄ってきて、そして泣いた。人目をばからず号泣するので、ぼくは取り敢えず駅南のベンチに移動して座った。

「ごめんね、ごめんね……」

何がごめんね、何だろうか？当時のぼくには無論知る筈がない。少し絵里さんは落ち着くと、初めてにしては道を知っている足取りで駅前に移動し、有名な蕎麦屋に入り昼食をとった。その後、絵里さんたつての希望で日本海が見える喫茶店までタクシーで移動し、入

った。この店は父の知り合いが経営しているところだ。なぜ東京に住んでいると聞いている絵里さんがこんな喫茶店を知っているのだろうか？

「変わらないね・・・」

一言、絵里さんが呟いた。

「これから言う話、信じてください。」

向かい合って座る僕の前で、絵里さんは深々と頭を下げた。そして話し始めた。なんでも、絵里さんには前世の記憶があり、新潟で生活していたこと。今から8年後、ベトナムに赴任中に交通事故で死んだこと。そして、前世が「柊一馬」つまり僕だったことを話した。正直、席を立とうと思った。だが、絵里さんの次の発言にぼくはその考えを取りやめた。

「一番の友人の名前は　。いまでも丸々さんのことが好きなのでしょう？」

当たりだ・・・ぼくのことを罫にかけたとは思わない。彼女の言ったことは本当なのだろう。僕は直感した。でも・・・

「でも、安心して。私はあなたの人生に介入する気はないわ。もう、柊一馬の人生は終わって久瀬絵里の人生があるのだもの。ごめんなさいね。新幹線の中で、ずっとそう考えていたのだけれど、いざ会うと・・・」

絵里さんの目に再び大粒の涙が出てきた。まずい、まずいぞ。いくら相手がぼくでもこれは反則じゃないか？

「これから、私たち友達になれるかしら？」

そう言っ手て手を差し出す絵里さん。僕は、その手をつかんでこういつた。

「もちろんです！」

それから連休・冬休み・春休みと一緒に絵里さんと過ごした。まあ、高校生の健全なお付き合いだったということにしようゲフンゲフン。

高校2年の夏休み、僕は絵里に誘われて、軽井沢で過ごしていた。

読みたい本は絵里に頼めば買っておいてもらえる。久瀬家の別荘で、僕と絵里は怠惰な読書三昧をしていた。その時、チャイムの音がした。絵里もぼくも半袖短パンという非常にラフな格好だったので、来客はまずいと考えて別荘の人に応対をお願いした。久瀬のご両親とはもうすっかり顔見知りで、僕のことを絵里の将来の旦那と考えているらしい。自分が、自分の旦那になる・・・想像しがたい光景だ。

別荘の人に呼ばれ、戻ってきた絵里の手には何かはがきがあった。

「ああ、西園寺のおばあさんの誕生会をやるのだったわね・・・一樹、一緒に行かない？」

そう言うことでぼくはいま、こうして行きたくもない、見ず知らずのどこかの金持ちのババアのパーティーにいるのだった・・・

ユミちゃんの「マリア様の心」のおかげで場が盛り上がった。僕はグレイプフルーツジュースを片手にカナッペをつまんだ。まあ、参加者はともかく酒と料理はうまい。どこぞの金髪元帥のようなことを考えて、夜風に当たろうと外に出たとき、一人の少年が転ぶのを目に入った。すかさず、フォローするべく、グラスの割れる音がし、何名かがこつちを振り返ったが少年がけがをすることはなかった。

「あ、有難うございます。」

緊張のあまりだろう。いまにも泣きそうな少年の為にぼくは炭酸水を2つ頼むと少年を外に連れ出した。

「ごめんなさい。ご迷惑をかけてしまって・・・」

バルコニーでぼくと少年は2人で話を始めた。

「君、名前は？」

「浅海です。浅海雄彦です。」

「そうか、浅海君か。パーティーは今日初めて？」

「ごめんなさい。こういう場に慣れていなくて、緊張しちゃって・・・」

「まあ、誰にでもこういうことはあるさ。気にしない方がいいよ。」

浅海君、いつまで軽井沢にいるの？」

「ええっと・・・来週に帰ります。」

「そっか・・・じゃあ、うちにおいでよ。うちといっても、知り合いの別荘なのだけだね。」

「誰が知り合いですって!？」

外の方に姿勢が見ていたため、後ろからの気配に気付かなかったばかり・・・振り返ると、満面の笑みを浮かべて、なおかつこめかみに少し血管の浮き出た絵里がいた。手にはさっきの炭酸水2つと何だろう・・・シャンペンらしきものがある。外見は高校2年生だが内心はアバウト30のオヤジだからな・・・そんなことを考えていると、凸ピンが飛んできた。結局、いままでの経緯を話すべく。素で痛い・・・

「次から気をつけないとだめよ。そうじゃないとこの伯父さんになっちゃうからね!」

そう言つて笑う絵里。明日、うちの別荘に来ることを約束して、雄彦君を見送った。そして、真顔になる僕たち。

「そっちの方はどうだった？」

2002年5月25日 東京都武蔵野市吉祥寺 13:00 視

点：麻耶

「おねえちゃん、あたしでいいの?」

姉にそう確認する私。

「いいよ。押しちゃいなさい。」

そう言う姉の声に従い、チャイムを押す私。

「はい。」

「本日はお招き有難うございます。大道寺です。」

「どうぞ。お入りください。」一樹さんの声がスピーカーからした。しばらくのち、ドアが開いた。

「ようこそ、いらっしゃい。待っていたよ。奈耶ちゃん、麻耶ちゃん。入って。」そう言われてあたしたちは久瀬家に入った。中では

すでに、早乙女さん姉妹、成瀬三姉妹、浅海・椎名両家がいてかしましく話をしていた。

「いらつしゃい。奈耶ちゃん、麻耶ちゃん。」

キッチンから絵里さんも顔を出す。

「お久しぶり！」

みんながそう言うてあたしたちを出迎えてくれる。きっと、この人たちがいなかったら、あたしたち姉妹はきっと心が折れていただろう……

1999年6月29日 東京都新宿区西新宿 新宿副都心 17:

00 視点：絵里

その日はちょうど父の会社に遊びに行っていた。まあ、そう言うことにしてこう。私の父は、世界的な投資顧問会社の代取をしている。そんなこんなで、前世の記憶を父に披露し、私と会社の為にその記憶を使い投資を行った。結果は上々。今後跳ね返る分を計算すれば巨額を稼ぎ出したことになる。まあ、インサイダーじゃないよね。これって……

私は会社の自分のデスクのロイターの端末をいじり、ドル円やポンド円マルク円の為替相場を覗いた。その時、ニュースの欄に気になるものを見つけた。

「キルギスで邦人射殺。」

このニュースのところでダブルクリックをする。詳細なニュースが出た。

「ロイター電。キルギス山間部でタジキスタン選挙オブザーバー大道寺豊下大教授が武装勢力に射殺された模様。」

私は会社の電話をつかみ、奈耶の家に電話をした。大道寺家と我が家は父が大学時代のゼミの同期ということもあり子供のころから知っている、いとこのようなものだ。早く出て、早く出て。そう祈って何回かコールをすると、受話器をとる音がした。

「はい、大道寺です・・・」

麻耶ちゃんの声がした。そして、私は内心呪いの言葉を百回唱えた。その声は・・・すごく沈んでいた。多分、父の死を聞いたばかりなのだろう。私は落ち着いていった。

「麻耶ちゃん、お母さんかお姉ちゃんは？」

「いまいない・・・あたし一人で留守番しているの。お母さんもお姉ちゃんも、外務省に行くって・・・おじいちゃんとおばあちゃんが来るまで、家で待っていなさいって・・・」

まずい。まずいぞ。このままではいたいけな小学校6年の少女がマスコミの食い物になってしまう。

「わかった。いまからあたしが行くから、あたしが行くまでだれも入れちゃいけないよ！わかったね？」

そう言つて、私は受話器を置いた。ちよつと考えて、私は総務に電話をした。

「永井さん？すぐにタクシーを呼んでください。そうです、で、行先は杉並区・・・」

時間はあまりない。ビルのエレベーターのボタンをこれほどにない高速で連打する私。早く来いや！慌ててエレベーターに飛び乗り、駆け足でビルの外に出ると私は呼んでいたタクシーに飛び乗った。

「運転手さん。杉並まで！」

タクシーの中で、私は当時普及しだした携帯電話をかけた。

「はい。柊です。絵里ちゃん、どうしたの？」

「一樹、冬休みにあつた大道寺さんのところ覚えている？」

「何？急に？覚えているよ。確か、T大の国際関係学の教授で中央アジア政治の権威だったかな？確か今頃・・・キルギスかどこかじやなかったっけ？」

「その大道寺教授が、武装勢力に射殺されたよ！」

私は思わず叫んだ。

「・・・」

電話の向こうでは一樹が絶句している。

「わかった。僕はどうすればいい？」

「ごめん。話を聞いてほしかっただけなの・・・後、今夜電話すると思うからでて。」

「わかった。」

そう言っただけで電話は切れた。

「なんでこうなったのだ・・・なんで！」

私は叫びだしそうになったが、タクシーの中ということもあり理性で抑えた。優しくした大道寺のおじさん。そのおじさんがキルギスで亡くなるなんて・・・私は、純粋な怒りを感じた。そう、これまではない純粋な怒りを・・・

大道寺家の前でタクシーは止まった。幸い、まだマスコミは来ていない。最も、無言の帰宅、という際には押し寄せるだろうが・・・私は料金を払い、大道寺家のインターフォンを鳴らす。

「はい・・・」

もう日は暮れたというのに、家には電気がついていなかった。

「ドア、開けて。」

私がそう言っただけでドアが開いた。中から麻耶ちゃんが出てきた。

「お、おねえちゃん・・・」

そう言っただけで麻耶ちゃんは私の姿を確認すると、安心したのかぼろぼろ泣きだした。

「ちよ、ちよつと!!」

私は慌てて麻耶ちゃんに駆け寄った。当時小学校高学年。まだまだ少女だ・・・

「おねえちゃん、ここにいてくれるよね。いてくれるよね・・・」
いまにもかき消えそうなか細い声で私を連呼する麻耶ちゃんを抱きしめながら、私は次にどうしようかを考えていた・・・

点：奈耶

その日、ショックを受けて帰宅したあたしとママが見たのは、真つ暗の部屋の中でソファに座っている一人の少女と、その腕の中で眠っている麻耶の姿だった。

「お邪魔しています。おばさま、この度は……」

麻耶がいるためだろう。立ち上がれずにそのままの姿勢で絵里さんは言った。

「絵里ちゃん、ありがとう。」

ママは感情を押し殺して笑顔でそう言った。

「奈耶ちゃん、麻耶ちゃんを頼むね。多分いま必要なのは親戚のようなお姉さんじゃなくて、実の姉の愛情だと思うの。」

そう言って絵里さんは麻耶を起こさないように静かに退くと、立ち上がって玄関の方に向かった。

「とりあえず、今日は失礼します。明日、弔問をしに来ます。」

そう言う絵里さんの目に私は涙があるのを確認した。

「両親も……ショックを受けているでしょう。」

そう言っつて、絵里さんは自分の家に帰って行った。

絵里さんが去ったのち、静かに寝ている麻耶の顔をあたしは優しく撫でた。ママは少し横になると言っつて、部屋で休んでいる。パパがいない今、あたしが麻耶を守らなくちゃならない。この日以来、あたしは決心した。強くなると……

視点：絵里

パスタのほかにピザを準備しなきゃ。そう思い、あたしはピザの窯の様子を見た。

我が家は本格的なピザ窯がある。おとしに設置したものだ。まあ、1998年に私が今のようになってから、いろいろなことがあったと思う。いろいろなことが新鮮に思える。だからこうして後輩を招いて昼食と一緒に取ろうとしている。しかし……遅い。いつものことながらひと組、来るのが遅いところがある。私は携帯電話で彼

女の番号に電話をしようとしたとき、インターフォンが鳴った。

視点：芽実

全く・・・いつものことながら我が次姉には呆れる。あたしはそう思いながら、久瀬家のインターフォンを押した。

「ようこそ。今日は15分遅れぐらいですね。」

そう言つて一樹さんが笑いながら家のドアを開けた。全く・・・隣で本を読みながら突っ立っている笙子お姉ちゃんのわき腹を私は小突いた。その痛みで正気を取り戻すお姉ちゃん。

「どうも、御招待有難うございます。」

「すみません。うちのバカ姉がご迷惑をいつもいつもおかけします。」

あたしは一樹さんに謝った。

視点：一樹

まあ、いつものことのいつもの仲のよい双子の掛け合いなので、僕はそんなに気にしていない。新堂笙子さんと芽実さんは双子の姉妹。長姉の梨々さんは生徒会の執行部補佐の関係で今日は来られないらしい。芽実ちゃん、だいぶ笙子ちゃんに振り回されたようだ。数冊の古本を片手にご満悦の表情の笙子ちゃんとちよつと疲れ気味の芽実ちゃん。これで今日は全員そろつた。ダイニングに案内すると、すでに話声で賑やかな空間になっていた。

その光景を見ながら、若い女の子っていいなあと満面の笑みをたたえていると、横から殺気を感じた。

「あのう・・・絵里さん？」

こめかみに青筋が立っている絵里にぼくは恐る恐る声をかけた。

「一樹君、ピザを運んでもらえるかしら？」

「Yes, Sir!!」

僕は敬礼して、ピザを窯から取り出した。

2002年5月25日 東京都武蔵野市吉祥寺 15:00 視
点：一樹

賑やかな昼食後、それぞれ好きなことをして皆過ごしている。ある人はゲームをし、ある人はおしゃべりをし、ある人は・・・読書に夢中になっている。

そんな中、僕と絵里さん、雄彦と遙ちゃん。沙耶ちゃんの5人は地下にある絵里さんの書斎に入った。この部屋は12畳ほどあり、大きな本棚5つとテーブル、ソファセットがある。読書好きのぼくと絵里さんが頼み込んで作ってもらった城みたいなものだ。

「桜田門に行ってきたのだった？」

絵里さんが紅茶を入れながら言った。思わず手が止まる雄彦。

「はい。警視庁の刑事部のお偉方に言われました。うちに囑託で入ってほしいと。」

考え込む雄彦。驚愕した様子で見る2人。

「実はね、警視庁からぼくらのところに相談があったのよ。いや、探りを入れたという方が正しかもしれないな。」

僕は答えた。

「え・・・」

「まあ、平たく言うと警視庁囑託の話をしたのはぼくらだよ。」

カップを持ってぼくは紅茶に口をつけた。視線の先には驚愕する3人がいる。

「しかし・・・なんで？」

「それはね、実はぼくらも何だ。」

正直にぼくは答えた。

「警察庁のあるお偉方に知り合いがいてね。その人から電話があったのだよ。で、マスコミ対策の意味合いもあって推薦したのだけど冗談半分だよ。」

まさか本当になるなんて・・・

「駄目です、だめです、絶対だめです!!」

遙ちゃんが身を乗り出して反対してきた。

「ほら、雄彦さん運動神経にぶいじゃないですか?!それに、目も悪いし、しかも高校生ですよ。そんな人が警視庁の嘱託とはいえ勤務できるはずがありません!」

おいおい・・・遙ちゃん興奮しすぎ。身を乗り出しすぎだつて。紅茶がこぼれそうだよ。雄彦に視線を向けると、ちよつと表情に怒りの色がさしていた。

「そうですよ!お兄ちゃん少し天然が入っているから、警察の人の足手まといになるじゃないですか?!それじゃあ警察の人がかわいそうですよ!」

かなりひどいことを言っているな。沙耶ちゃん。案の定、雄彦が切れた。

「機会を与えていただきありがとうございます。せつかくの機会です。で、私の全身全霊をかけて、怪盗ラファエルの捜査に協力しましょう。」

あちゃゝ。やっぱりこうなったか・・・

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9850o/>

怪盗ラファエルを捕まえろ！！(The Hunt for phantom thief Raphael！！)

2010年12月28日21時59分発行